

祭礼に用いられる装束の実態 —殿賀花田植えの胴取り衣装を例に—

檜 崎 久美子*

(2019年11月29日 受理)

A Study of the Costumes of DOTORI in the Agricultural Festival Tonoga Hanataue

Kumiko NARAZAKI*

Keywords: Kimono 和服, Festival costume 祭礼装束, Traditional culture 伝統文化

1. はじめに

本研究は安芸太田町で行われている殿賀花田植えの胴取りが着用する衣装に関するものである。

筆者は神祇祭祀にかかわる装束の研究を専門としており、2018年度から広島女学院大学学術研究助成をいただき、「地域における行事を軸とした持続可能な開発のための教育プログラムの検討」、2019年度は「地域における行事を軸としたESDのための教材開発」と題して、地域の祭礼行事とその装束を軸に、学校教育、特に家庭科に取り入れ、ESDに寄与する教材の作成を目的に活動している。

昨年度、山口県で最後となってしまった花田植え^{注1)}を継承している地域の小学校へ赴き、資料としてまとめた早乙女の衣装を用いて、「総合的な学習の時間」で授業を行ったところ、地域とその文化を知る上で比較できる教材として有益に作用した(図1)。このことから、やはり地域の歴史や文化とつながる行事とそれに関わる装束の重要性を再認識し、引き続き研究を進めたいと考えている。

本論では昨年に引き続き、今年度の実践状況のまとめと課題の再確認及び殿賀花田植えの胴取り衣装について計測、観察結果の報告を行う。また、昨年度行った祭礼に関わる方へのアンケートについて言及し、地域の祭礼と装束の意義、また祭礼装束を教材化することの効果について考察を行う。



図1 萩市立育英小学校での授業の様子(2019年3月19日 著者撮影)

2. 殿賀花田植えの歴史と現在の課題

本論で取り上げる安芸太田町の殿賀花田植えについては、前報を参照されたい^{注2)}。

前報で触れなかった歴史についてであるが、殿賀田楽保存会が編集した『民俗文化 殿賀田楽』^{注3)}によると、殿賀田楽が加計町の無形民俗文化財に指定されたのは1981年11月のことであった。当初は「田囃し」という言葉が、広く近郊近在から牛や早乙女を呼び集めて行う華やかな田植えになったことから「田楽」「花田植」「大花田植え」「大代」ともいうようになったとされている。広島県芸北地方においてこの行事が行われるようになったのは『加計町史』によると1398年としている。しかし、確実性のある資料としては山県郡大朝町で発見された『田植草紙』があり、その原本が化政年間(1804～1830年)とされているため、江戸時代半ばには確実にそ

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科准教授

うした田植えが行われていたといえるであろう。

殿賀田楽の成立については、昭和初期に各地において田楽競演会が行われるにあたり、内容充実を図るため殿賀田楽団を結成している。加計町で田楽競演大会が始まったのは『加計町史』によると1934年で、12団体参加したうちのひとつとしての殿賀田楽団も参加している。加計町での競演大会は戦争などによる中断がありつつも1963年まで20回開催されたようである。殿賀田楽団はこの競演会だけでなく、他地域の競演会や祝賀行事、記念行事にも参加していたようで、戦前、戦後を通じ、娯楽の少なかった時代に民俗芸能として田楽が大きな役割を果たしていたのではないかと、『民俗文化 殿賀田楽』の編集者は述べている。

その後、地域での競演会が下火になっても地元では継承されていたようであるが、過疎・高齢化による田楽の後継者不足に加え、1983年に加計町で集中豪雨被害が重なり、一時中断に追い込まれている。しかし、伝統を後世まで残したいと、保存会福祉会など7団体が殿賀花田植実行委員会を発足し、1996年に復活したとのことである。

2019年5月の「殿賀田楽花田植&安芸太田町病院まつり」が第24回と数えることから、復活してからは継続して取り組まれていることが分かる。

一方、前報でも報告したが、殿賀田楽振興会の方によると地域の小学校が2016年に廃校したこともあり、後継者不足はますます深刻である。今年の披露においては、胴取りは基本的に男性が担う役割であるが、人数が足りないことから女性が参加していることが印象的であった^{注4)}。早乙女は他地域から来てもらい、飛び入りで振りを覚えて参加することも可能であるが、太鼓は経験者でもない限りいきなりの参加は現実的ではない。芸能そのものを継承することはやはり地域に根差した人材の確保、行事への関心と参画意識の向上が必須であることがうかがえた。

なお、2019年度も10時30分から開会され、殿賀花田植えが披露された。その後、田楽参加者は実際に田んぼに入り、太鼓と歌で調子を取りながら一列になって田植えを行っていた。昨年同様、早乙女以外にも地元住民が若いも若きも田んぼに入り、本学の学生や教員も参加し、地域住民との交流や自然と一体化する貴重な体験が今年も盛んにおこなわれたことは素晴らしいことであった。

3. 胴取り衣装について

今回取り上げる胴取りの衣装は2019年度の殿賀花田植えで用いられたものである(図2、図3)。この装束に実



図2、3 胴取りの装束(正面、背面)(2019年5月20日著者撮影)

際は既製品であると思われる白いステテコを着用する。構成、サイズについては田楽振興会から衣装を一部お借りし、計測を行った。以上をまとめたところ、表の通りである(表1、図4)。

なお今回お借りした衣装のうち、笠は修繕中のためお借りできず、また、着装者が自前で用意するものが2つあり、それがステテコと、兵児帯であるがそれについての計測はできなかった。兵児帯のみ画像で示す(図5)。

早乙女衣装と比較していえることは、胴取りの浴衣、手覆いやたすきも手作りのもので、伝統芸能衣装として統一感を持たせるために揃えたことがはっきりとうかがえる結果となった。また、前報でも指摘したが、早乙女衣装同様、他地域の胴取りにあたる太鼓をたたく人々との衣装の文様と異なり、やはり地域性があることが明らかとなった。

表 1 胴取り装束の構成と寸法（資料を基に著者作成）

資料番号	名称	数量	色	サイズ	素材	備考
1	タスキ	1	水色	幅 8 cm	綿100%	・幅 30 cm の布を二つ折りにし、さらに二つ折り ・切りっぱなし ・無地 ・手作りか
				長さ 308 cm		
2	帯	1	茶色みのあるえんじ	幅 8.5 cm	綿100%	・無地 ・たすきの素材よりややかための生地 ・手作りか
				長さ 162 cm		
3	紐	1	黄	幅 4.5 cm	ポリエステルか	・二つ折りで端を入れ込んだ縫い方 ・無地 ・手作り
				長さ 205 cm		
4	手覆い	左右 1 組	黒	図 4 参照	綿100%	・手作り ・左右の別があるかないか不明
5	浴衣	1	白地に紺で注染	図 4 参照	綿100%	・吉原大小つなぎ文様 ・手縫い ・穴が開いている所がある

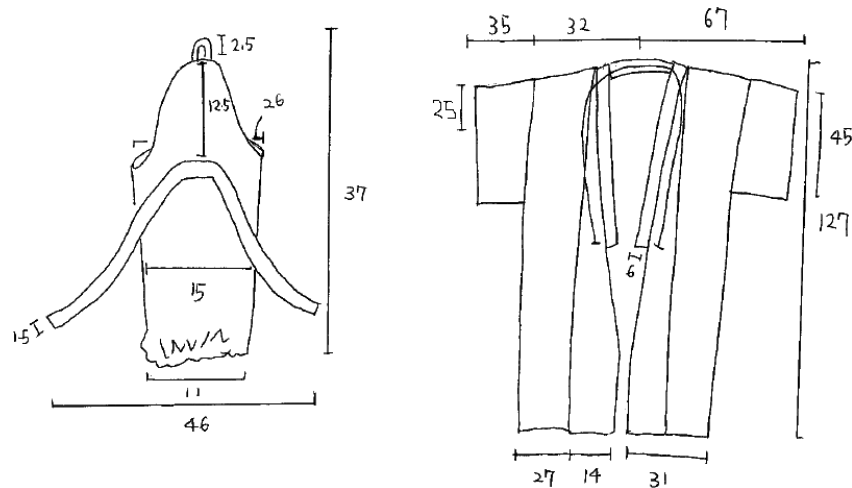


図 4 浴衣および手覆い寸法 (cm) (資料を基に著者作成)



図 5 兵児帯（胴取り衣装着用者の私物）（2019年 5 月11日 著者撮影）

4. 実態調査について

2019年 2 月 8 日に安芸太田町ふれあいプラザにて現在 殿賀花田植えに参加している地元の方へ実態調査を行った。

回答くださったのは早乙女経験者の女性 3 名と胴取り経験者の 2 名である。まずアンケート紙による調査を行い、それを補完する形でインタビューを行った。紙面の都合上、回答を表にして示す（表 2）。

この度回答してくれた方はどの方もベテランといえる方々で、殿賀地区に長年お住まいの方がほとんどであった。回答者番号 3 の方はもともと地元がこちらで、子どものころに参加した経験があり、また、地域を離れていた時には参加していなかったが、観覧には戻ってきてい

表2 経験者のアンケート調査結果

回答者番号	1	2	3	4	5
役割	早乙女	早乙女	早乙女	胴取り	胴取り
年齢	74歳	76歳	85歳	63歳	60歳
参加年	1977年ごろ	50年前から	2003年	2003年	1998年
参加回数	数えきれない	40回	15回	25回	20回
参加理由	義母からの誘い	婦人会の役員就任時	女性会、振興会の役就任時	家族からの継承	家族からの継承
練習時期	夜	回答ナシ	一週間前の夜2回程度	2週間前から	回答ナシ
着付け継承／ 着付け担当 ^{注5)}	見よう見まね	自分です	先人から継承	自分	自分
衣装着装による気 持ちの変化	ある	ある	ある	ある	ない
変化の内容	華やぐ、季節を 感じる	一体感	興奮、匿名性が上がる	緊張感	回答ナシ

て、この度終の住み処として殿賀地区に戻ってきたのを機に参加しているとのことで、地域行事として定着していること、また、子どもの頃に経験があるからこそかもしれないが、地域住民であれば離れていた期間があっても比較的容易にかかわることができることが分かった。また、練習については、早乙女は一週間前、胴取りは二週間前の夜ということで、著者が想像するより少ない練習回数であった。経験者であるからかもしれないが、壮年期の男女に参加を促す際には、良い情報であったと考えられる。

また、伝統的装束の効果について質問したところによると、やはり殿賀花田植え専用の衣装であることから、「気持ちが高揚する」、「一体感を得られる」ことが明らかとなった。一方で「変わらない」と答えた方もおり、参加回数が多く、慣れてしまい、新鮮味がないという感覚になっている可能性が考えられる。

5. まとめ

本論では安芸太田町で行われる殿賀花田植え（殿賀田楽）に着目し、その中で太鼓を力強い振りでたたき胴取りの装束に着目し、その実態をまとめた。

浴衣の柄は早乙女の装束と同様に地域に独特のものが見られ、地域性があることが明らかになった。また、構成される装束のうち、地元の方々の手製であろう装束が多く含まれ、また、おおよそすべての装束が準備されたものを使用する早乙女と異なり、胴取りの装束では、着用者が自前の兵児帯、ステテコを使用しているという実態が明らかになった。ステテコは現在でも多くの場所で購入できる男性用下着であるが、男性用の兵児帯については、現代ではあまり多く見かけず、祭礼用の服飾品で

あることがうかがわれ、このままでは継承の際難しい側面が考えられた。また、胴取りは激しく動く振りがあるためか、浴衣に破れがあり、修繕しないまま使用しているようであった。早乙女衣装同様、修繕や保管の体制に改善が必要であると考えられる。

また、前報でも述べたように、祭礼を継続していくためには人員や場所の確保が重要ではあるが、伝統的装束の着付けや保管、手入れに関しても通常の衣生活とは異なった知識や技術が必要になることがやはりこちらの衣装でもうかがえた。

しかし、伝統装束を教材化することで地域の文化を知り、創造性を育む可能性が、萩市育英小学校での授業実践において感じられ、この点についてさらに実践を増やすことで若い世代に生きた学びを提供し、地域を担う次世代の育成、世代間交流、地域文化への理解などを進めていきたいと考える。引き続き、この実態調査を基盤とし、伝統文化に関わる装束を学校教育プログラムに組み込んでいく研究へと発展させていきたいと思う。

注

- 1) 先方の地域では田植えばやしと呼ぶ。
- 2) 榑崎久美子、「祭礼に用いられる装束の実態―殿賀花田植えの早乙女衣装を例に一」、『広島女学院大学人間生活学部紀要』、第6号、pp. 75-79, 2019
- 3) 2004年に発行されている。
- 4) 殿賀地区ではかつて女性のみで運営する殿賀女性田楽という団体が存在しており、その経験から2019年度は胴取り役に回ったとのことだった。
- 5) 早乙女には継承について、胴取りには着付け担当者についてうかがった。